棕櫚の主日礼拝説教「自分を救わない」予稿

日本基督教団石神井教会　2026年3月29日

【招詞】ゼカリヤ書　9章9節

9 娘シオンよ、大いに踊れ。
　娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。
　見よ、あなたの王が来る。
　彼は神に従い、勝利を与えられた者
　高ぶることなく、ろばに乗って来る
　雌ろばの子であるろばに乗って。

【棕櫚の行進・福音書日課】マルコによる福音書　11章7～10節

7二人が子ろばを連れてイエスのところに戻って来て、その上に自分の服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。8多くの人が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て道に敷いた。9そして、前を行く者も後に従う者も叫んだ。
　「ホサナ。
　主の名によって来られる方に、
　祝福があるように。
10 我らの父ダビデの来るべき国に、
　祝福があるように。
　いと高きところにホサナ。」

【福音書日課】マルコによる福音書　15章21～41節

21そこへ、アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人が、田舎から出て来て通りかかったので、兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた。22そして、イエスをゴルゴタという所――その意味は「されこうべの場所」――に連れて行った。23没薬を混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはお受けにならなかった。24それから、兵士たちはイエスを十字架につけて、
　その服を分け合った、
　だれが何を取るかをくじ引きで決めてから。
25イエスを十字架につけたのは、午前九時であった。26罪状書きには、「ユダヤ人の王」と書いてあった。27また、イエスと一緒に二人の強盗を、一人は右にもう一人は左に、十字架につけた。† 29そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った。「おやおや、神殿を打ち倒し、三日で建てる者、30十字架から降りて自分を救ってみろ。」31同じように、祭司長たちも律法学者たちと一緒になって、代わる代わるイエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。32メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。
33昼の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。34三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わ

が神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。35
そばに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる」
と言う者がいた。36ある者が走り寄り、海綿に酸いぶどう酒を含ませて葦の棒に
付け、「待て、エリヤが彼を降ろしに来るかどうか、見ていよう」と言いながら、
イエスに飲ませようとした。37しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。
38すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。39百人隊長がイエス
の方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られ
たのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。40また、婦人たちも
遠くから見守っていた。その中には、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マ
リア、そしてサロメがいた。41この婦人たちは、イエスがガリラヤにおられたと
き、イエスに従って来て世話をしていた人々である。なおそのほかにも、イエス
と共にエルサレムへ上って来た婦人たちが大勢いた。

主イエスは子ロバに乗って【こども説教のために】

教会の裏庭から切ってきた枝を振って、最初の讃美を歌いました。今日は「棕櫚の主日」、主イエスが十字架につけられるためにエルサレムにお入りになられたことを記念する日です。主イエスは、ロバにお乗りになってエルサレムにお入りになられました。そのとき、人々が野原で取ってきた枝を道に敷いて迎えたように、わたしたちも、枝を持って主イエスをお迎えいたしました。十字架を目指して進んで行かれる主イエスを、お迎えしたのです。

弟子たちと旅をして来られた主イエスは、いつもご自身の足で歩いていらっしゃいました。これまでにエルサレムに来られたときも、歩いてお入りになられていたのでしょう。ところが、十字架を目指してエルサレムに入られたとき、主イエスは、弟子たちにロバを用意させました。「主がお入り用なのです」（マルコ 11:3）と言って、ロバを借りて来させたのです。

そのロバは、まだ誰も乗ったことのない子ろば（同 11:2）でした。ロバは、人や荷物を運ぶために飼われる家畜ですが、最初からうまく乗せることはできません。少しずつ訓練をして、人や荷物を運べるようになるのです。けれども、主イエスは、まだ訓練されていない子ロバを用いられました。本当は役に立たないかもしれないものを選ばれたのです。「あなたのことを、神がご用のために必要なのです」とおっしゃって。

弟子たちの教会は、この名もないロバのことを記念してきました。主イエスが十字架への道行きでお用いくださったことを、記念してきました。

十字架を目指された主イエスは、わたしたちのことを「神がご用のために必要なのです」と呼び出してくださいます。それは、小さなご用かもしれません。自分では価値が無いと思って、応じないこともできるかもしれません。けれども、それに応えることもできます。そのときには、神に用いられ、人に用いられることの幸いを知るようにされるのです。

十字架を担ぐ

「棕櫚の主日」から始まる「受難週」を迎えました。教会が最初の時代から大切にしてきた「聖なる一週間」です。

この週を祈りのうちに過ごすこと無しに、わたしたちが「イースター（復活祭）」を迎えることはできません。殊更に大切にしてきたのは、「洗足木曜日」、「受難日」、「聖なる土曜日」の三日間です。わたしたちの教会でも、「洗足木曜日」と「受難日」には特別な祈りの集まりを設けています。「土曜日」は、祈りの集まりは設けられませんが、それぞれが主のご受難の出来事を心に納めながら、ご復活に備えます。古い習慣に従う教会であれば、その土曜日の日没から、ご復活の祝いを始めることになるでしょう。深夜の礼拝、あるいは徹夜の礼拝の中で、主の死とご復活にあずかる洗礼の式を執り行う教会もあるかもしれません。

エルサレムを目指され、十字架に向かって進み行かれた主イエスの旅に、わたしたちは、弟子たちと共に伴わせていただいてきました。

主イエスは、従って行こうとする者たちにおっしゃいました。「**わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい**」（マルコ 8:34）。

弟子たちだけにおっしゃったのではありません。群衆、すなわちすべての人に向けて、そうおっしゃったのです。これこそが、命を救う道だからです。自分の命を救う道だからです。「**自分の命を救いたいと思う者は、それを失う**」（同 8:35）のです。まったく逆説的に、主イエスは、そうおっしゃいました。自分の命を救おうとすればするほど、人は、自分の命を失うのだ、と。むしろ、自分を捨て、自分の命を失うような道を行くときに、人は、自分の命を得ることになるのだ、と。

もちろん、主イエスは、ある種の政治家のように「戦地に行って血を流して来い」とおっしゃっているのではありません。それは、自分の命を蔑ろにするだけでなく、相対する者の命をも蔑ろにすることです。主イエスは、自分の命も、他の者の命も蔑ろにしない、その命をどちらも救い、生かす道をお示しなのです。人は、自分の命だけで生きているのではないからです。他の者の命があって、人は命を保ち、生きているのです。自分だけ救われて、他の者はどうでもよい、というわけにはいかないのです。他の人の命を尊び、救い出すために、自分の命を少しも用いることなく安全なところに置いておくわけにはいかない、それを差し出し、用いていただかなければならない、とお教えなのです。

この週、主イエスはご自身が背負われた十字架をお示しくださいます。シモンに託されたように、わたしたちにもその十字架を担がせてくださいます。

「本当に、この人は神の子」

ご受難の金曜日の朝、主イエスは、兵士たちに鞭打たれて刑場に引き出されて行かれました。十字架刑に処せられるためです。その処刑のための十字架を、囚人は自ら運ばされたのでしょう。「ヨハネ福音書」は、主イエスが**自ら十字架を背負い…ゴルゴタという所へ向かわれた**（ヨハネ 19:17）と伝えています。ところが、他の福音書は、**シモンというキレネ人**が、兵士に命じられて主イエスの十字架を代わりに担がされた、と伝えています。

そのとき、主イエスの旅に伴っていた弟子たちは皆、散らされてしまっていました。ゲッセマネでの最後の祈りをなさった後、当局の者たちに捕らえられてもなお、主イエスの後を追っていた弟子のペトロも、大祭司の屋敷で三度、「**そんな人は知らない**」（マルコ 14:71）と否定してしまっていました。主イエスが十字架を担いで刑場に向かったとき、その近くになお留まり続けていたのは、女の弟子たちばかりだったと言います。もちろん、彼女たちも、主イエスのことを**遠くから見守ってい**ることしかできなかったのです。

弟子たちの一人でもいれば、その者が兵士に命じられて主イエスの十字架を代わりに担がせられたのかもしれません。いいえ、弟子たちの一人が自ら名乗り出て、代わりに担ぐこともできたでしょう。けれども、弟子たちの誰も、そこにはいませんでした。名乗り出る者はいませんでした。だれも、「十字架を背負う」ことができなかったのです。

ただ、たまたまそこに居合わせたというだけの理由で、キレネ人シモンが、その十字架を担ぐことになったのです。キレネは、アフリカ北部、今のリビアにある町です。過越祭を祝うために、そこから出て来て、巡礼していたのでしょうか。「聖書協会共同訳」では、「**畑から帰って来て**」（21 節）とされていますから、キレネに所有の農園があって、そこからエルサレムの自宅に帰ってきた、ということなのかもしれません。

その人の名が、息子たちの名と共に、教会で伝えられてきました。たまたま主イエスの十字架を担ぐ機会を与えられたこの人が、息子たちと共に弟子たちの教会のメンバーになったからなのでしょう。シモンは、主イエスの十字架を担がされたとき、何かを体験し、何かを知り、何かを得たのでしょう。

主イエスの十字架のもとに、わたしたちは集められています。百人隊長のように、義務的にこれを見上げる者もあるかもしれません。それでも、わたしたちは、そこで何かを体験し、何かを知り、何かを得るのです。百人隊長が、「**本当に、この人は神の子だった**」と口にしたように。

十字架に向かわれたお方の道行きに伴いましょう。ご自分を救おうとされずに、多くの者を命の道へと呼び出してくださるお方は、ここにおいでです。